

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) ※7月29日更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 27,500～28,460 円

[NY ダウ]

【当面の想定レンジ】 31,500～33,300 ドル

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 11,600～12,600

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 126.000～137.000 円

エリオット波動とは

株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

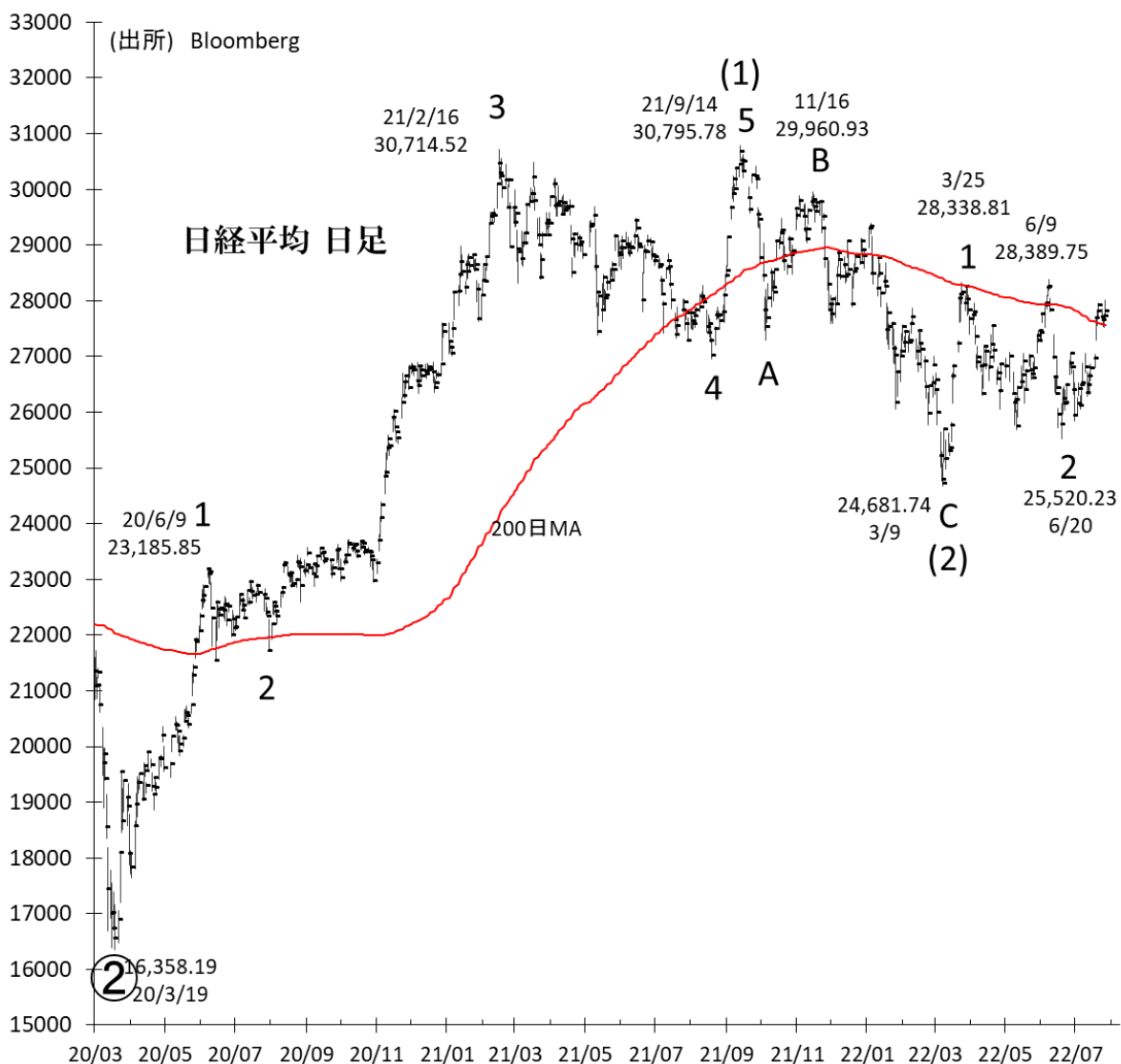
米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均

世界金融危機の底値を付けた 08 年 10 月以降、日経平均はおよそ 4 年周期で底入れしており、現在の相場はコロナショック底(20 年 3 月)を起点とする 4 年サイクルの中にあります。この 4 年サイクルは、二つの 2 年サイクル(2 年+2 年)で構成されており、今年 3 月から後半の 2 年サイクルに入っています。今回、新たな 2 年サイクルは「サード・オブ・サード」と共に始まりました。ここからすると、24 年中に日経平均は過去最高値・38,915 円(ザラバで 38,957 円)を更新してもおかしくありません。



【日足・エリオット波動分析】

日経平均は昨年 9 月来の調整第(2)波を 24,681 円(3/9 安値)で終了し、そこから第(3)波の上昇トレンドに入った可能性が高いとみています。

さらに 25,520 円(6/20 安値)を起点に、**第(3)波の第 3 波「サード・オブ・サード」の上昇が始まった可能性があります。これによれば、今年後半高という見通しになります。**

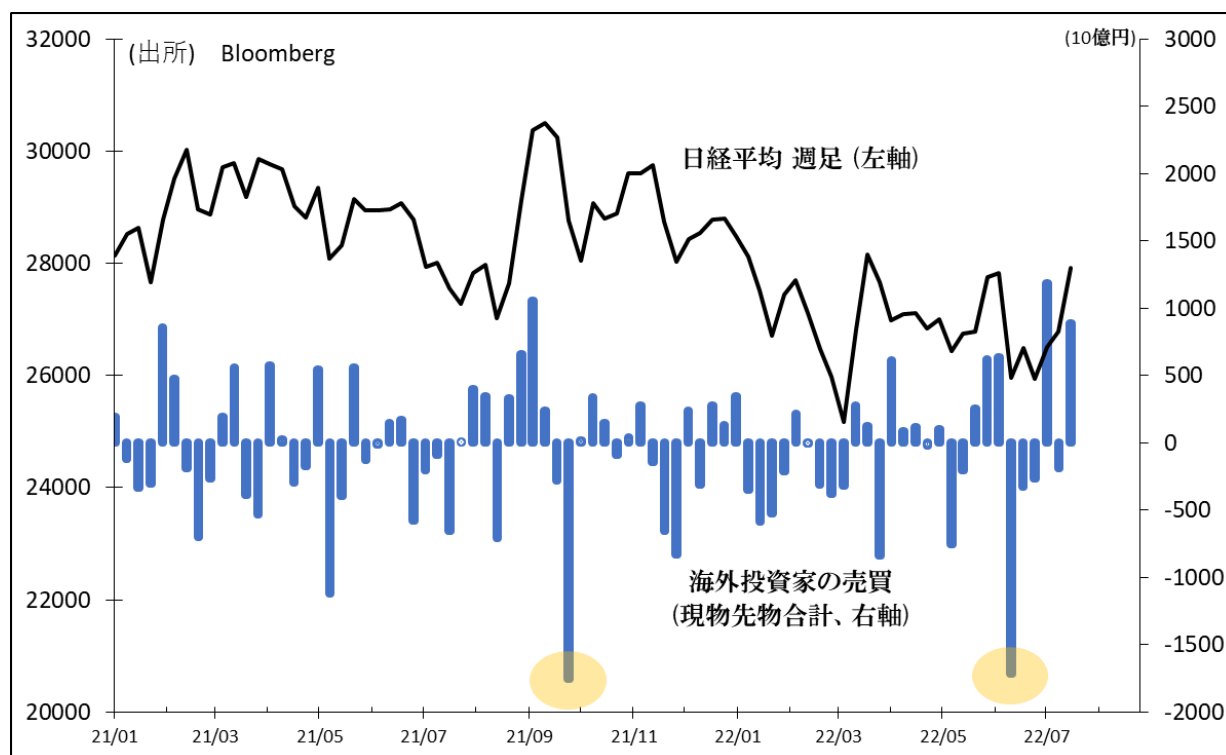
日経平均は 7 月 20 日以来、7 営業日連続で 200 日 MA を上回っています。今年、日経平均が 200 日 MA を上回るのは終値ベースで 3 回目(ザラバを含めると 4 回目)ですが、今回は日数的にはもっとも長く 200 日 MA を上回っています。

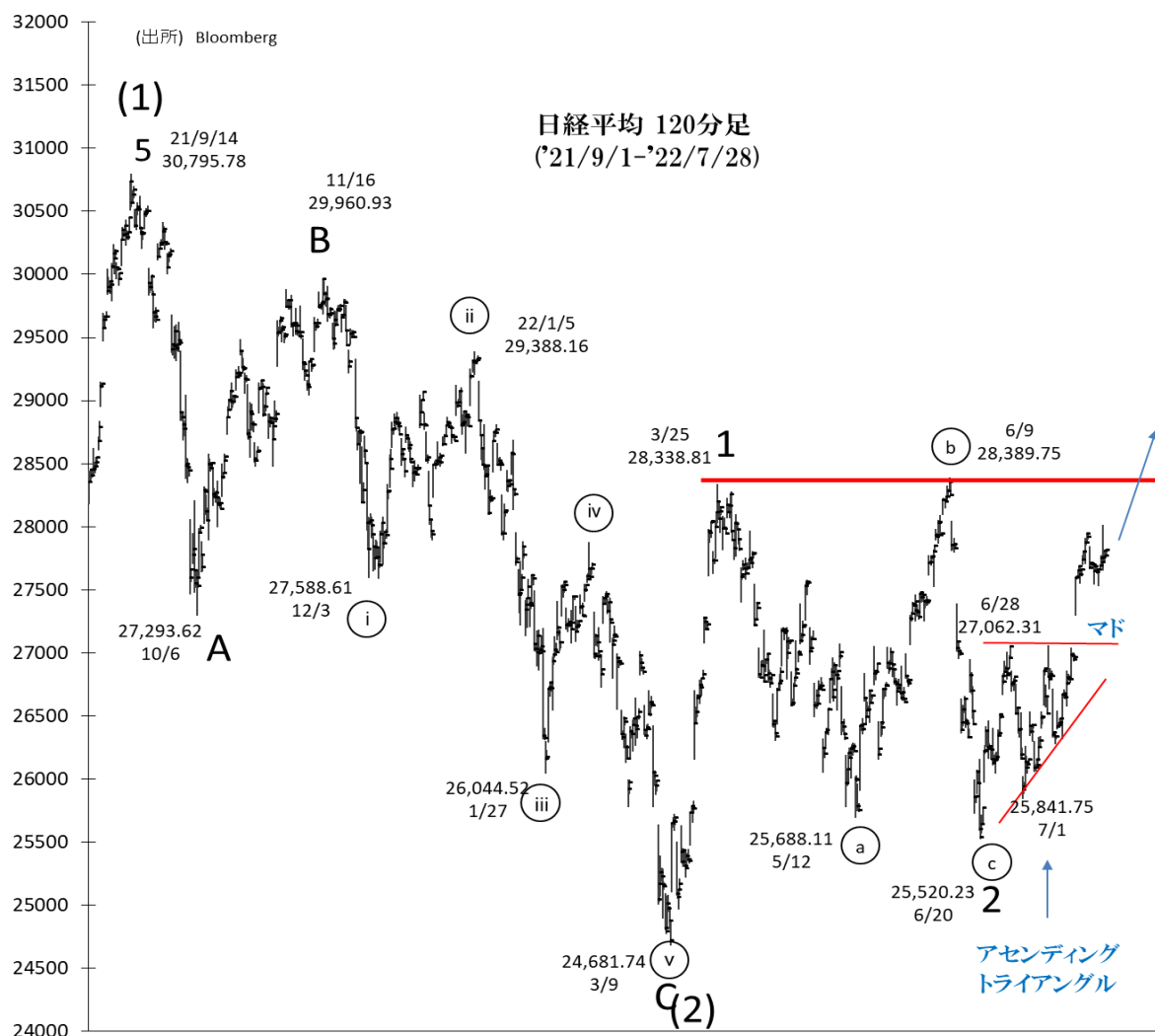
200 日 MA(27,561 円、7/28 終値時点)はまだ下向きですが、日経平均が現水準で推移し続ければ一仮の話です—11 月中旬から 200 日 MA は上向きに転じます。

28 日の日経平均予想 EPS は 2151.23 円に上昇。21 年 11 月 8 日に付けた過去最高水準(2179.25 円)や市場予想の平均値(2242 円)、これらが視野に入ってきました。なお現在の予想 EPS を基準に PER14~15 倍まで日経平均が買われると、3 万~3 万 2 千円に上がる計算です。

7 月第 3 週(7 月 19 日—7 月 22 日)、海外投資家は日本株を現物先物合計で 8856 億円買い越しました。買い越しは 2 週ぶりです。

筆者は海外投資家によるセリングクライマックスが、6 月第 3 週(6 月 13 日—6 月 17 日)に起きたとみています(現物先物合計で 1 兆 7156 億円売り越し)。6 月第 4 週から 7 月第 3 週まで 1 兆 2958 億円を買い越してはいますが、まだ買い戻しの域を出ません。海外投資家による日本株再評価の流れが強まるとすれば、それはこれからでしょう。





【時間足・エリオット波動分析】

日経平均は 25,520 円(6/20 安値)からの「アセンディング・トライアングル」(強気パターン)を、マドを空けて上放れました(7/20)。トライアングル上辺(2 万 7 千円処)の突破を契機に、日経平均の上昇が加速しています。7 月 28 日、日経平均は一時 28,015 円に上昇しました。

面白いことに、今年上半期(1~6 月)の日経平均の終値平均は 27,021 円であり、トライアングル上辺水準に一致しています。そのような重要な節目を上抜けたことにより、今年下半期高への動きが今後は強まるかもしれません。一方、2 万 7 千円未満の価格帯は今年の買いゾーンといえそうです。

日経平均は今月から来月にかけ、今年最大の節目である 28,300~28,460 円を試す動きとなりそうです。
 [28,460 円]…21 年 9 月高値からの下げ幅に対する 61.8%戻り

この 28,460 円(28,500 円処)ブレイクをきっかけに、日経平均はいよいよ 3 万円大台試しを視野に入れる展開となるでしょう。

【7 月 29 日 8:08 更新】

NYダウ



【NY ダウ日足&時間足・エリオット波動分析】

NY ダウの1月からの下落には波の重複(オーバーラップ)が目立ちます。オーバーラップが目立つ波動は、衝撃波(impulse waves)ではなく修正波(corrective waves)に分類されます(例外あり)。この見方が正しければ、NY ダウの1月高値は「当面の天井」であって、数年にわたるような「大天井」はまだ付けていないことになります。

1月高値(36,952ドル)から「ダブル・ジグザグ」(W-X-Y)による下落は、29,653ドル(6/17 安値)を以て終了した可能性がある、とみています。

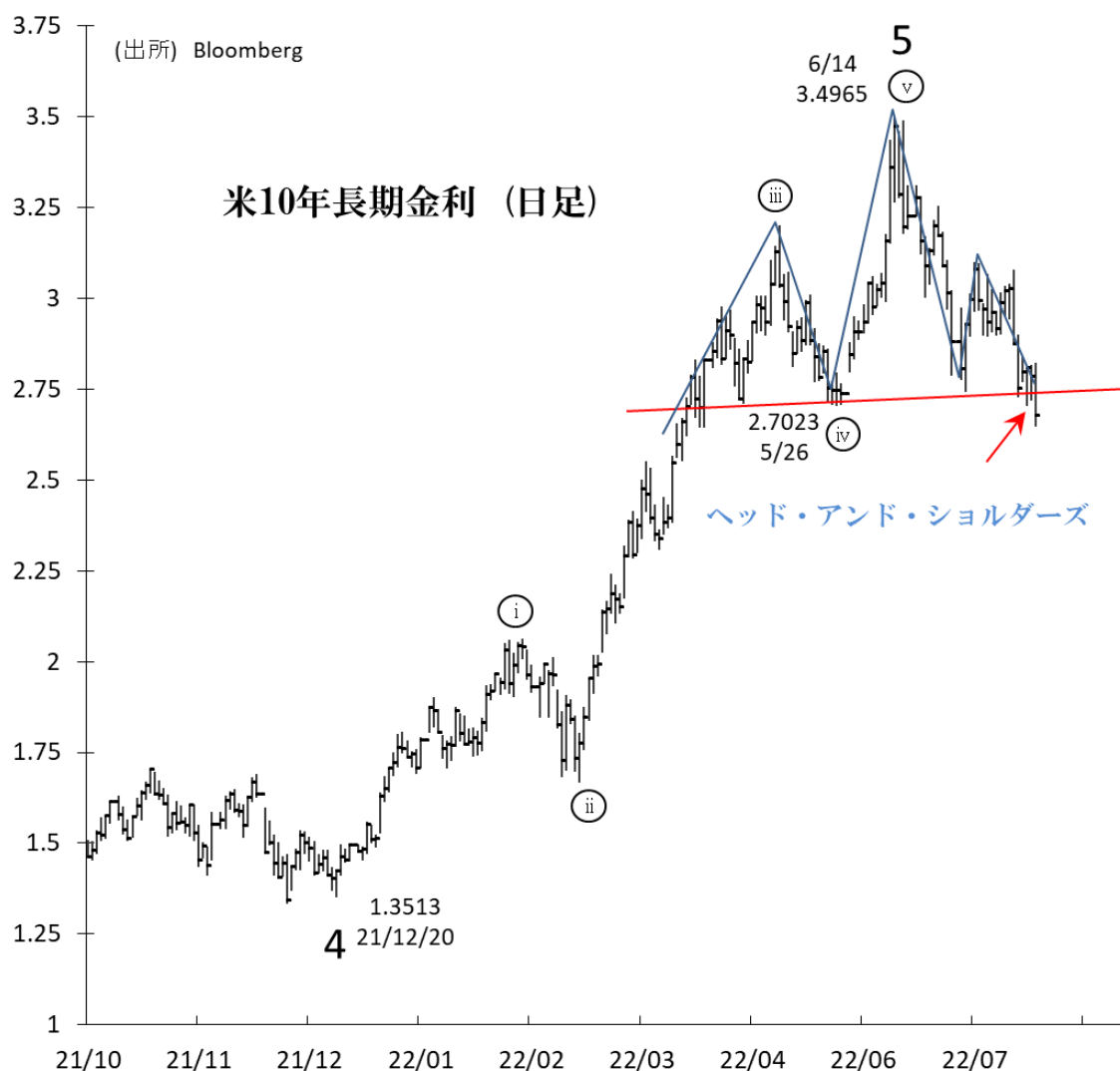
7月28日、米10年長期金利は「ヘッド・アンド・ショルダーズ」のネックラインから、明確に下放れ始めました。チャートパターンからは、米10年金利の今後2%割れもあり得るでしょう。このような金利低下基調は、株高のサポート要因になりそうです。

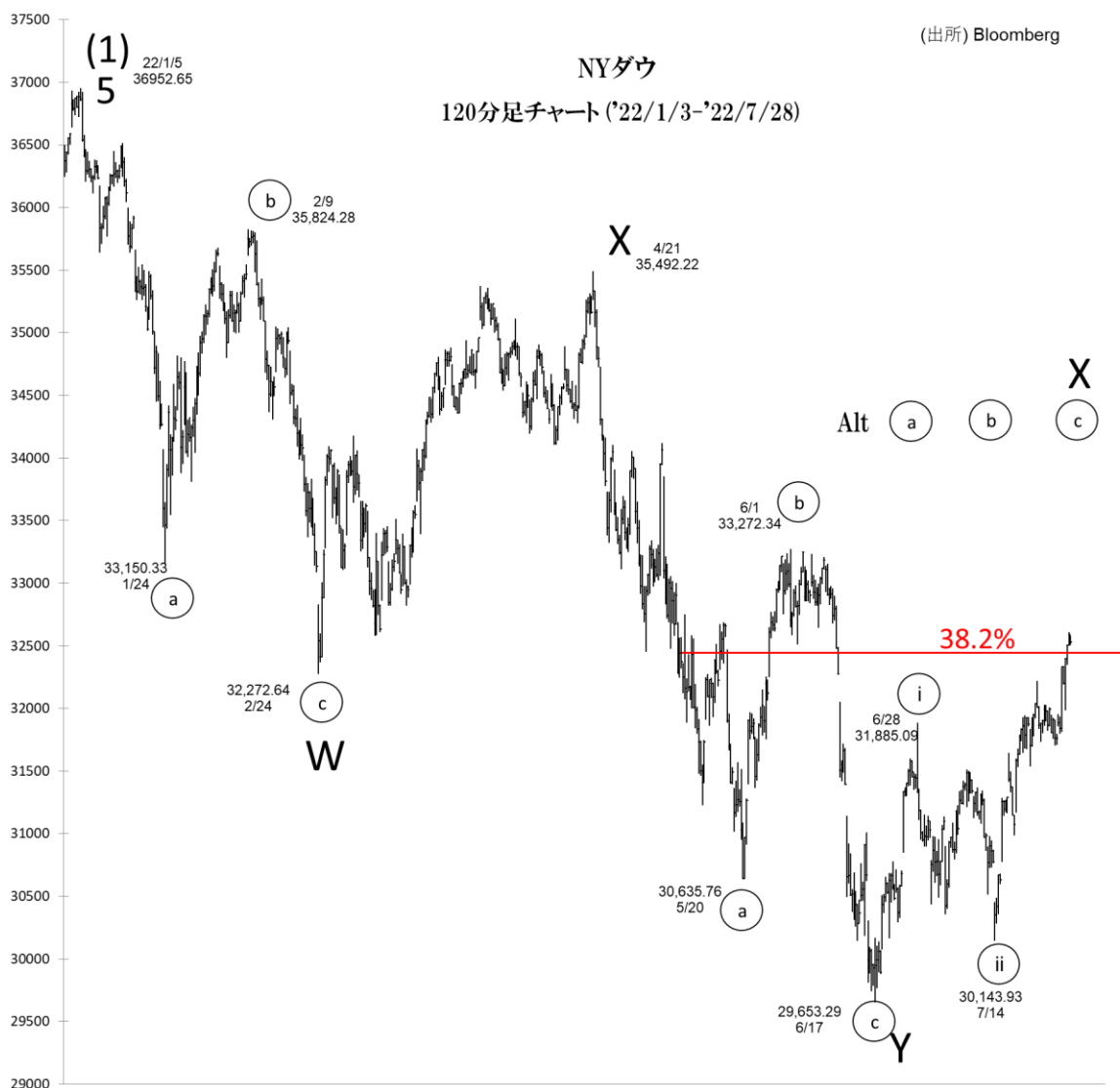
NY ダウは 28 日に一時 32,609 ドルまで上昇しました。終値ベースで 32,441 ドル(1 月からの下落に対する 38.2%戻り水準)を上回っており、短期的にも、33,303 ドル(同半値戻り水準)を目指すでしょう。

【オルタナティブ・カウント】

1 月高値からの下落フォーメーションは、「トリプル・ジグザグ」(W-X-Y-X-Z)。29,653 ドル(6/17 安値)からはリバウンド・X 波に当たります。この先 3 万ドル処を割ると、3 番目のジグザグ Z 波(A-B-C)入りが示唆されるでしょう。

【7 月 29 日 8:44 更新】





ナスダック

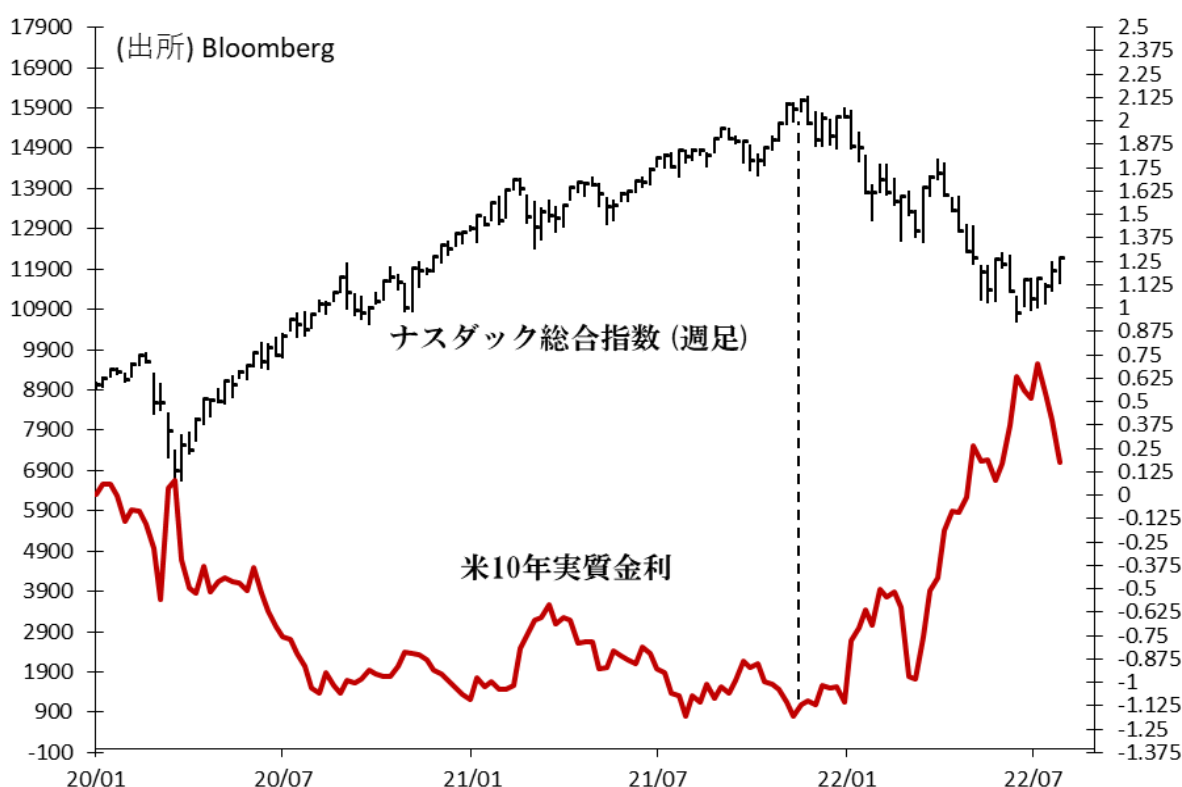


2010年9月以降でナスダックは50カ月MAを月末値で下回っていません。ナスダックの2022年前半のパフォーマンスは30%下落と非常に厳しいものでしたが、それでも50カ月MA(10,698、7/28現在)を維持しています。今後の巻き返しに注目です。

米10年実質金利は、当面のピークを6月14日に付けていますが、ナスダックが直近安値を付けた日(6/16)と2日違いです。振り返れば実質金利が史上最低水準(-1.25%)を付けたのは21年11月10日です。そこから日を置かず、21年11月22日にナスダックは史上最高値を付けています。つまり実質金利とナスダックの間に、強い逆相関性の存在が伺えます。

筆者は、この先は実質金利が徐々に水準を切り下げる展開を予想しています。それに伴い、ナスダックも値を切り上げていく展開となりそうです。

実際のところ、足元ではそのような展開になっています。



【ナスダック総合指数日足・エリオット波動分析】

6月16日安値(10,565)を以て、21年高値(16,212)からの A-B-C パターンによる下落が終わった可能性に注目しています。

しばらくは上値試しの展開が続くでしょう。引き続き、12,320(6/2 高値)への打診を想定しています。12,320を上抜くと、次は 12,603(38.2%戻り水準)を目指す展開でしょう。

【フィラデルフィア半導体株指数(SOX 指数)】

SOX 指数は、1月4日高値(4068)からのダブル・ジグザグ((W)-(X)-(Y))による調整を、ちょうど半年で終了したかもしれません。

SOX 指数は短期的にも、[2989]を試す局面を迎えています。7月28日高値は 2950 です。

[2989]…3030(3/14 安値)から 3633(3/29 高値)までの上げ幅(603 ポイント)を、2386(7/5 安値)に加算することで得られる水準

2990 を上回ると、1月からの下落中では最大幅のカウンター・トレンドであることが確認されます。そうなると、SOX 指数は一段と上値を試す展開となるでしょう。

【7月29日 9:08 更新】



米ドル/円



22 年上半期の米ドル/円は、22 円幅もの大幅な上昇(米ドル高・円安)を演じ、7 月には 24 年ぶり円安水準を更新しました。筆者が描く理想的なシナリオは、「2023 年 6 月頃に 1 ドル=150-160 円を達成する」というものです。なお(A)波(11 年 10 月→15 年 6 月)と、(C)波(21 年 1 月～)が等しく上がる N 計算値からは、[152.869 円]というターゲットが導かれます。

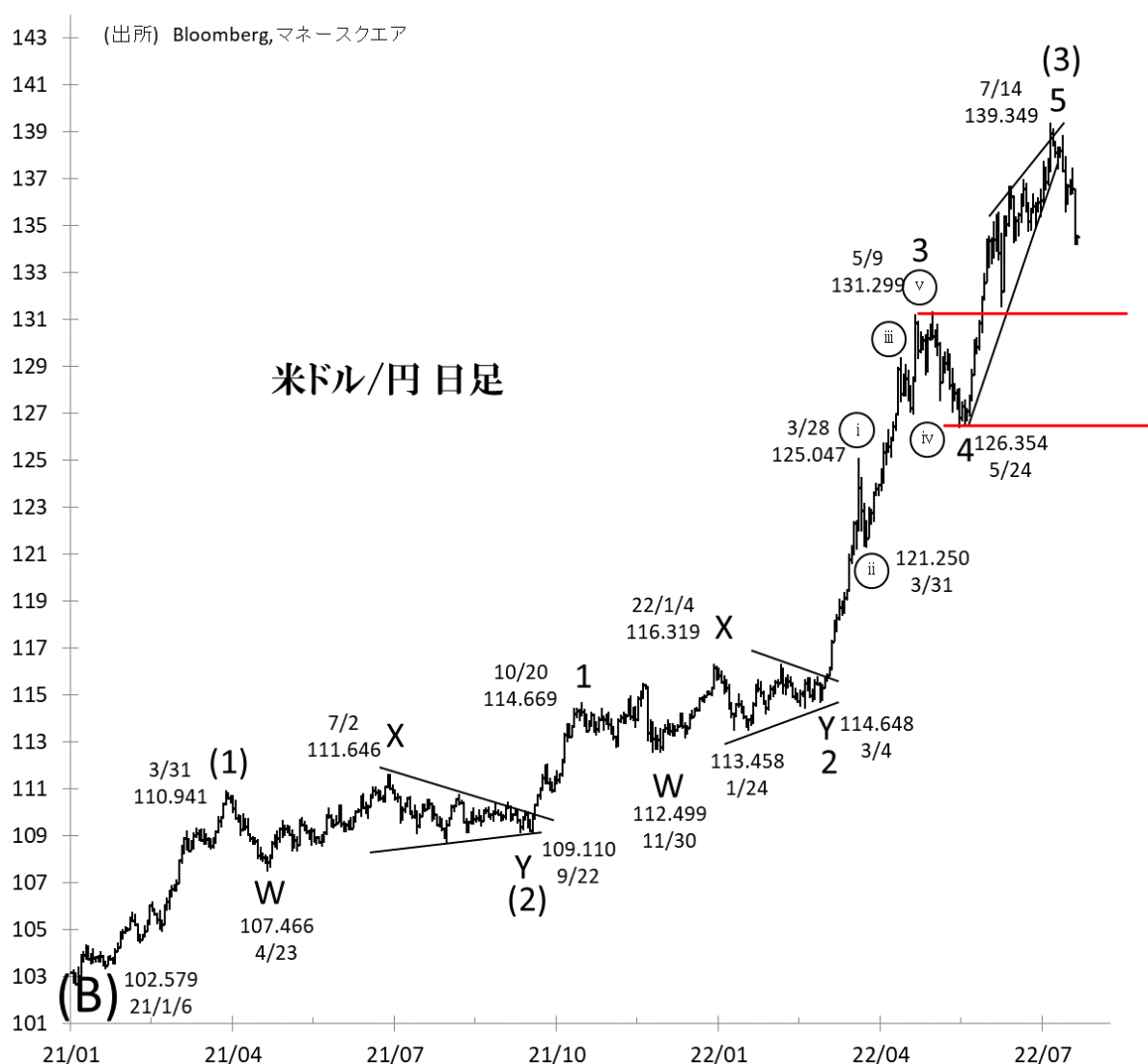
【月足・エリオット波動分析】

米ドル/円は 102.579 円(21/1/6)を起点とする(C)波の上昇トレンド(米ドル高・円安)にあります。この(C)波は 8 年サイクルに基づき、2023~24 年^注まで続くと考えられます。

(C)波は 5 波動構成((1)~(5))となりますが、今のところ第(3)波まで終了した可能性があります。

なお 7 月ローソク足は、このままだと長い上ヒゲを持つ陰線「流星」となり、それは当面の米ドル/円ピークを暗示します。

注 これまでの円安ピッチは、筆者の想定よりも、半年程度速い印象です。この点を考慮すると、(C)波の終了の時期も想定より前倒し(22 年末~23 年前半の期間?)になる可能性があります。



【日足・エリオット波動分析】

126.354 円(5/24)を起点とする、マイナー級第 5 波「ダイアゴナル・トライアングル」は、139.349 円(7/14)で完成した可能性が高いでしょう。この見方通りなら、現在インターミディエイト級の第(4)波の下落(米ドル安・円高)が進行中です。

第(4)波の下値ターゲットレンジは、レッサー・ディグリー第 4 波領域[131.299 円—126.354 円]です。第 5 波のパターンがダイアゴナル・トライアングルという見方が正しければ、第(4)波のターゲットは(控えめにみても)126.354 円(5/24)となります。

ところで、第(2)波(21 年 3 月～9 月)は複雑なもみ合いパターンでした。この点に着目すると、第(4)波のパターンはおそらくは単純な形、ジグザグ(A-B-C)のコースを辿る可能性があります(オルタネーション)。

【時間足・エリオット波動分析】

7月22日、米ドル/円はダイアゴナル下辺からの下放れが確認されました。

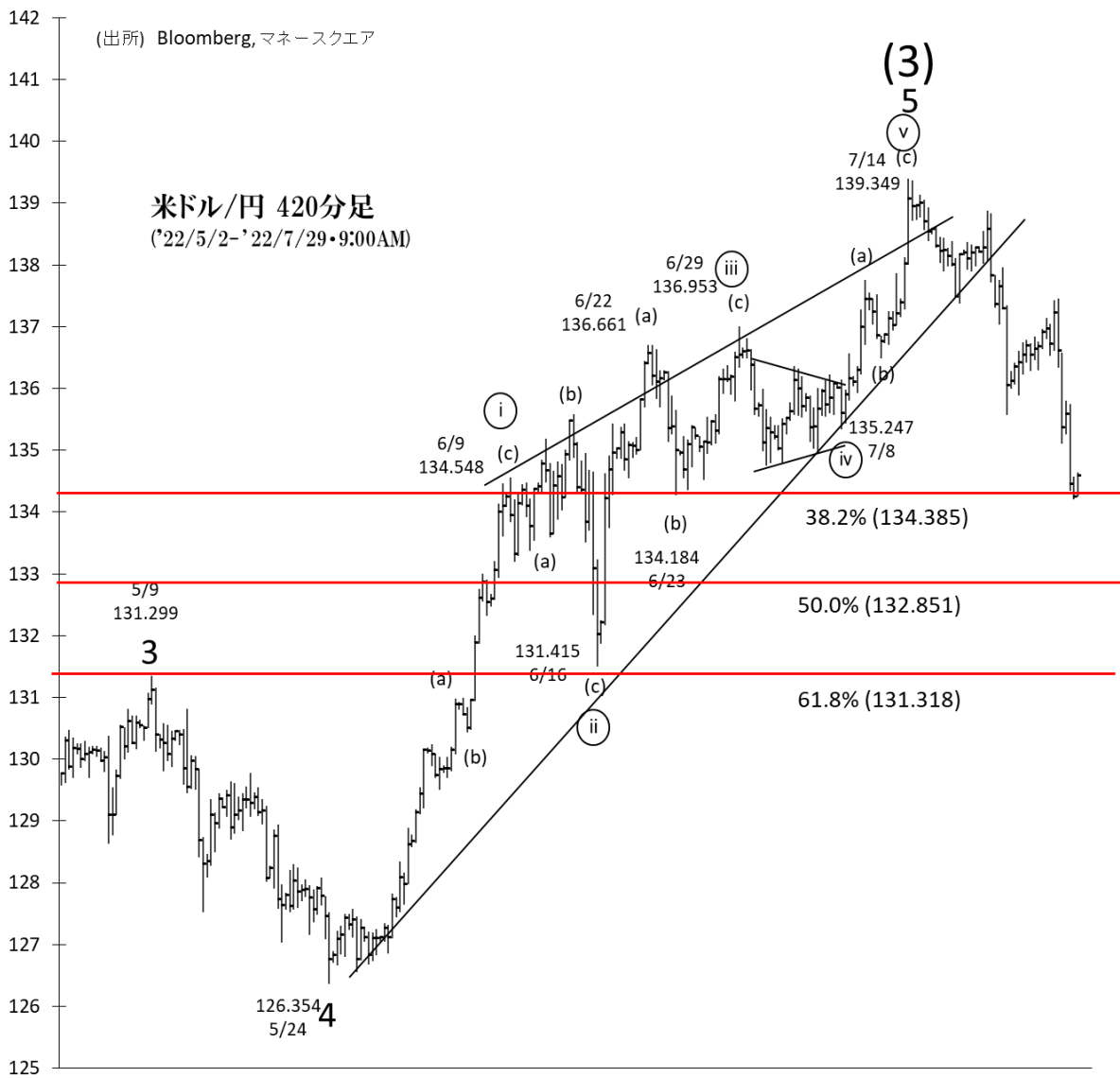
足元では、フィボナッチ比率の第1サポート[134.385円]まで下げています。仮にこの辺りでいったん下げ止まるようなら、短期的に135円台半ば～137円へのリバウンドがありそうです。

一方、このまま水準を切り下げていく場合は、[132.851円]や[131.318円]などが、フィボナッチ比率に基づくサポートレベルです。

これらサポートレベルは第(4)波の最終着地点の候補ということではありません。

最終的には126.354円へ向けた米ドル安・円高の動きを想定しています。

【7月29日 9:21 更新】



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および取引所株価指数証拠金取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもあります。お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引や取引所株価指数証拠金取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引における取引手数料は無料です。

・取引所株価指数証拠金取引における委託手数料は注文が成立した日の取引終了後の値洗い処理終了時に証拠金預託額より、新規および決済取引のそれぞれに徴収いたします。手数料額は、通常 1 枚あたり片道 303 円(税込)、NY ダウリセット付証拠金取引および NASDAQ-100 リセット付証拠金取引は 1 枚あたり片道 33 円(税込)です(ただし、建玉整理における委託手数料は無料です)。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差(スプレッド)があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率(為替リスク想定比率)を取引の額に乗じて得た額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率(為替リスク想定比率)は変動いたします。取引所株価指数証拠金取引に必要な証拠金額は、商品ごとに当社が定める 1 枚あたりの必要証拠金の額に建玉数量を乗じる一律方式により計算されますが、1 枚あたりの必要証拠金額は変動いたします。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
